

【特集企画】

「体温調節と生体恒常性維持」

生体の恒常性維持において、体温を調節することは欠かすことができない重要な機能である。体温調節は生体リズムの制御、代謝制御など多くの生命現象に関与している。そのため、体温調節機能の低下は生体での恒常性破綻を招き、多くの疾患や老化の進行に悪影響を及ぼすと考えられている。また体温調節を駆使することは生存率を向上させるのに必要不可欠な要素であり、動物の生存戦略における生体恒常性維持の観点からも注目されている。このように、多様化する体温調節メカニズムを介した生命現象を理解することは、今後様々な疾患治療法開発の糸口になることが期待される。

本特集号では、近年明らかにされてきた体温調節メカニズムに焦点を置き、生体恒常性維持への関与について、本分野で最先端の研究を展開されている国内外の4人の先生に執筆をお願いする。永島計先生（早稲田大学）には体温調節の脳機構と加齢による変容について、佐藤亜希子先生（国立長寿医療研究センター）には老化、睡眠における体温調節機構の役割について、梅崎勇次郎先生（シンシナティ小児病院医療センター）には体温調節と代謝シグナル伝達との関係について、山口良文先生（北海道大学）には冬眠による低体温を介した生存戦略機構について執筆していただく。

編集委員

赤木 一考

多田 敬典